

留学を終えて

聖マリア女学院高等学校 小田 芽寧

(オーストラリア)

2月1日に日本を離れてから約10ヶ月経ち日本に帰ってきました。来た当初は長いなと思っていた10月も、終えてみると本当にあつという間だったなと感じています。この10ヶ月間は、私の人生の中で最も短く濃い期間でした。

オーストラリアで感じたことや学んだことは数え切れないほどあります。AFSの留学は語学だけではなく異文化体験を目的としています。だから私はみんなとは違った体験がしたかったので、沢山のオーストラリアでしか出来ない経験をさせて貰いました。私がその中で最も印象に残っているのは、アボリジニの授業とタスマニアンデビルの保護活動です。

私の通っていたホストスクールにはアボリジニの授業がありました。この教科はオーストラリアでしか学べない教科であり、学ぶべきものであるなと思い選択しました。日本にも先住民の方々がいますが、高校で詳しく学んだりすることはありません。とても興味深く面白い授業でした。また私の周りにはアボリジニの血を受け継いでいる方が多くいて、いろいろなお話を聞くことができました。たくさんの方が、自分の苗字の由来だったり、時の貴重なものを見せてりしてくださいました。

タスマニアンデビルはオーストラリアに生息している動物です。赤ちゃん熊くらいの大きさで見た目も似ています。そのタスマニアンデビルは数が大変少なくなっており、絶滅危惧種に指定されています。それは人間が彼らの住む環境を奪っているからです。それを阻止するには人間が手を貸すしかありません。タスマニアンデビルは山に生息していて肉食の動物です。私たちはその子たちに道路で引かれて死んでしまったカンガルーの肉をあげたり、生まれた赤ちゃんにミルクをあげたりしました。この活動は普通だったら出来ないそうです。とても貴重な体験をさせて頂きました。

ホストファミリーはとても素敵な家族でした。初日から私を家族の一員として受け入れてくれました。初日、私はいろいろな不安に襲われました。でもファミリーは暖かく迎えてくれて寄り添ってくれて、私はこのファミリーの一員になれて良かったなと思いました。学校で何かあったときも1番に気が付いて味方になってくれて、親身になって話を聞いてくれました。泣いているときも笑っているときも、ホストファミリーも一緒に泣いたり笑ったりしてくれました。私は本当に恵まれた環境にいるなと思いました。家族と過ごした時間が1番多く、思い出が沢山あります。思い返すと涙が出てくるほど素敵な思い出で、寂しいです。人との別れがこんなに寂しかったのは初めてで、会いたくてたまりません。私にとって本当の家族のような存在です。家族の大切さに気づいたのも留学があったからだと思います。

私は自分の英語力に自信がなかったので、行ったばかりの頃友達とうまく関わられませんでした。だから周りの友達から色々言われたりしてある一定の期間人と関わるのが怖かったです。新しい学

校に変わってからそんな自分を変えたいと思い、自分から積極的に話しかけたり声をかけたりしました。授業中理解できないことがあったりしたら、いつも周りにいる仲の良い友達がサポートしてくれたり、教えてくれたりしました。また放課後は、オーストラリアでは16歳から運転できるので友達が家まで車で送ってくれたり、KFCで話したり凄く楽しかったです。私の通っている学校は私立で、みんなそれぞれ離れたところに住んでいて定期的に会える距離でもないので、地元の学校に行ったらこんな感じだったのかなと少し違う気分を味わえました。

この留学は私にとって大きな財産となりました。これは私だけの力ではなく、AFSの皆様や奨学金をご支援いただいた皆様、そして日本で応援してくれている家族、友達、学校の先生方、オーストラリアの友達やホストファミリーなど色んな人の協力なしではできなかったことだと思います。こんなに恵まれた環境で何不自由なく幸せに満ち溢れた生活ができたことに感謝を忘れず、この経験が私にとって実りあるものだったことを証明できるように日々成長していきたいと思います。